

新任教授紹介

本号では、聖マリアンナ医科大学の教授に新たにご就任された中島 貴子先生をご紹介します。



話し手●中島 貴子

聖マリアンナ医科大学臨床腫瘍学講座教授

聞き手●西條 長宏

公益社団法人日本臨床腫瘍学会事務局特別顧問

中島 貴子先生プロフィール

1998年横浜市立大学医学部卒業，2002年国立がんセンター中央病院レジデント，2007年国立がんセンター中央病院外来化学療法科・消化器内科医員，2010年聖マリアンナ医科大学臨床腫瘍学講座講師，2012年同准教授を経て，2016年より現職。主な専門分野は，腫瘍内科・消化器がん。日本内科学会認定医，日本臨床腫瘍学会がん薬物療法専門医，日本癌治療学会がん治療認定医など。

西條 本日は，聖マリアンナ医科大学臨床腫瘍学講座の教授に就任されました中島貴子先生をお招きして，これまでの活動や今後の教室運営についてお話を伺いたいと思います。

医師になろうと思ったきっかけ

西條 まず，先生のご経歴について伺います。もともと医学部ではなかったとお聞きしましたが，どういった経緯があったのですか。

中島 子供の頃から“医師”というのも数ある理系の職業の1つとして候補ではあったのですが，大学を受験するときも理系のなかで何を職業として選ぶかが決まっていなかったもので，東京大学の理科二類という選択肢が広がる部門を選んで入学しました。しかし，大学に通いはじめて1年目の途中であるきっかけがあり医師になろうと決め，医学部を受け直しました。

西條 何がきっかけだったのですか。

中島 ちょっとお恥ずかしいのですが，テレビドラマの『白い巨塔』を見たことです。もともと山崎豊子という作家が大好きで，その原作となった小説も読んでいました。大学時代に，たまたま1970年代のドラマの再放送を見まして，改めて面白いなと思い，もう一度本を読み直してみると，医師という仕事に興味湧いてきて，医学部を受け直そうと思立ったわけです。

西條 大学で医学を学ばれ，卒業時にはどの分野に興味をもっていたのですか。

中島 内科系，外科系の両方とも興味があったので，スーパーローテーションできる研修病院を選びました。しかも，

なるべく common disease をたくさん診れる病院で働きたいと思い，大森赤十字病院で研修を受けました。

2年間は外科，内科問わず，小児科，産婦人科も含めてスーパーローテーションしたのですが，腰のヘルニアがひどく，外科系の手術で長時間立っていられなかったこともあり，内科系，特に総合内科的に広く勉強をしたいと思い内科系に進むことを決めました。私の出身大学である横浜市立大学の先生から，第二内科(当時)は総合内科医として働いている先生が多いと聞き，3年目に出身大学に戻るというかたちで第二内科に入局しました。

消化器がん領域を選んだ理由

西條 ローテーションの間，腫瘍学を学ぶ機会はありましたか。

中島 全くなかったですね。入局後2年間は医局の関連病院に行き，そこで総合内科に携わっていましたが，そのうちがんと診療に興味をもつようになりました。「がんの内視鏡診断は難しい」と言っていた私に，総合内科医だった恩師が専門施設に行き勉強することを勧めくださり，医師になって5年目の2002年から国立がんセンター(当時)で勤めることになりました。

西條 最初から消化器がんを専門として目指そうと思っていたのでしょうか。

中島 はじめは内視鏡部のレジデントとして入りましたが，内科をローテーションしているうちに，腫瘍内科に関心が移ったのです。日本の内視鏡技術は世界のトップですから，内視鏡をやりたいという若手はかなりいました。私は特別器用なわけでもなかったのですが，これは私でなくても